

特殊なニーズのある子ども(人)のきょうだいに 対する支援システムの構築

なぜ、きょうだいに支援が必要か？

- 1) 障害者に親亡き後も含めて伴走する重要な家族構成員だから
- 2) きょうだい関係が悪い場合が3割といわれる (Grossman, 1972)
- 3) きょうだいが心身症、不登校などになる場合があるが、きょうだいの課題(親の関心を引き難い、地域の偏見、介護負担、親亡き後の後見)は、みずごされやすいから
→ 健全な家族関係に基づいてこそ、共生社会が実現されると考えられる

きょうだいの課題とニーズの調査結果 (1998-2002)

- 1) すべてのきょうだいは何らかの課題を経験していたが、怒る、我慢する以外の対処方法は乏しかった→相談を増やしたい
- 2) 約1割のきょうだいいか障害について医学的な理解をしていなかった→有効な情報提供の必要性
- 3) 約2割の母親は、きょうだいの心身の不調のため医療機関に相談した経験があった
- 4) グループワークに参加を希望したきょうだいは3割であった
- 5) 対照群に比べ、母親の自己概念が高い傾向がある場合に、きょうだいの自己概念は有意に高かった
- 6) グループワークに参加希望したきょうだいは母親との関係と課題領域の自己概念得点が高かった

学童後期のきょうだいを対象にした予防的ワークショップSibshopの日本版開発・評価 および普及(目的は感情と経験の共有・対処方法の紹介、目的6組織の活動開始を支援)



I. 大人のきょうだいと学生による討論のないワークショップの実施と評価(2002-2005) →「スッキリした」



II. 経験豊富なファシリテーターによるワークショップにおける円滑な討論(言語表現による経験や感情の整理)の実施と評価(2006) →討論ありがたい3割、他人の意見が聞けてよかった10割、自分のことが話せた5割、スッキリした5割、家族とも話したい3割



III. 学童前期のきょうだいへの討論導入のための人形劇の開発と評価(2006) →家族と見たい9割



IV. 未就学きょうだいと母親を対象としたワークショップと問題提起紙芝居の開発(2007) →母親間の強い交流ニーズ



学生実習におけるレクリエーションのグループワーク(2008)

啓発, 普及, 人材育成



保護者、専門職者を対象とした啓発講演(2005-)



V. 中高校生きょうだいを対象としたワークショップ(2007)



親の会主宰キャンプで、きょうだいにレクリエーションを提供、学生への研修(2006-7)

研究代表者

国立障害者リハビリテーションセンター研究所
障害福祉研究部 北村弥生 kitamura-yayoi@rehab.go.jp
<http://www.rehab.go.jp/ri/fukushi/ykitamura/kitamurayayoi.html>

